

ディレクター日誌 (活動・子どもたちの様子)

期 日：平成28年7月22日(金)～30日(土)【8泊9日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺の山域(山口市阿東)

参加者：県内の小学5・6年生(男子24名、女子8名)

1日目 開会行事・仲間づくり・ダッフルシャッフル(荷物の詰め替え)

期 日：平成28年7月22日(金)

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場(体育館) 泊

目 標：出会いの日(ふれあい体験)

【活動の様子】

ときどきわくわく。わくわくときどき。言いようのない胸の高鳴りとともに起床した。今日から8泊9日のチャレンジプログラムが始まると思うと期待よりも緊張が少し勝ってくるように感じる。このプログラムに関して、事前踏査や事前研修を積み重ね、しっかりと打ち合わせは行ってきたので、大丈夫！！と自分に言い聞かせる。

9時からのスタッフミーティングでは、子どもたちのチャレンジを全力でバックアップを確認すると同時に、熱中症対策や熊対策の最終確認も行った。今年は例年以上に暑いことと、多くの県で熊が頻繁に目撃されていることがやはり気になる。

このプログラムは、単に山歩きを目的としたプログラムではない。個人の成長やグループの成長などを目的に、意図的に設定されたものである。そのため、子どもたちをどう迎えるのか、どのコースを使用するのか、どう時間設定を行い、どのような活動を仕組んでいくのかというサポートスタッフの打ち合わせにも余念がない。



10時半から開会式が始まった。班ごとに集まり、全体で大きな一つの円になった。まだ、みんな緊張していて誰もがよそよそしい表情を見せている。

しかし子どもたちは、きっかけは何であれ、既に大きなチャレンジの一步を踏み出している。そのチャレンジを支えようとするスタッフたちの表情も頼もしい。子どもたちのチャレンジを支え、全員で大きな任務を成し遂げようという雰囲気を感じた。

開会式の中で、子どもたちに「9日間を通して3つのチャレンジをしよう!!!」と投げかけた。その3つとは、自分・仲間・自然に対するチャレンジである。この3つのチャレンジを意識しながら歩き続けることで、全員が何かを掴み取って欲しいと強く願う。

開会式の後、本格的にグループ活動がスタートした。これから9日間を過ごすための道具等を確認(ダッフルシャッフル)し、個人装備や共同装備を大きなザック(大型のリュックサック)に分配して詰めていく。共同装備とは、テント・タープ・ポリタンク(水2L)・食器類・食材等々で、かなりの量や重さになる。初めて背負うザックはかなり重く、簡単には立ち上がれない。「持ってあげるよ」「ありがとう」「せーの」子どもたちのコミュニケーション量が一気に増える。仲間とのチャレンジを感じた最初の瞬間だったかもしれない。

出発準備が出来た班から実際に歩き始める。今日のテント設営場所(以下、テン場)は体育館と自然の家のキャンプ場。今日のテン場は遠くない。実際にザックを背負って移動する練習にどの班も時間をあてていた。ザックの重さは約15kg。女の子から「こんなに重い荷物運ぶのなんて無理～!!」と声が上がった。子どもたちの不安は、荷物の重さと比例するように重くなっていく。

最初の3日間は、「トレーニングフェーズ」と言い、インストラクターやサブインストラクターが子どもたちに山の歩き方からテントの立て方、パッキングの仕方等をかなり丁寧に教えていく。今日はその中でも初めて尽くしで子どもたちは疲れたことと思う。夕食に温かいスパゲティを食べた。みんなですべて初めて野外で食べる食事はどんな味だったのだろうか。

夕食後、ミーティングを行った。ミーティングでは、ふり返りと明日のことについて話し合う。明日の歩きが子どもたちにとって充実したものでありますように。



2日目バックパッキング

期 日：平成28年7月23日（土）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場（体育館）～神角神社 泊

目 標：旅立ちの日（協力の体験）

【活動の様子】

全班5時に起床。今日から本格的な山歩きが始まるが、暑い一日になりそうだ。

初めて立てたテントの撤収に手間取りながらも、仲間と協力しながら作業する子どもたち。これから日を追うごとに手際よく作業できるようになっていくだろう。各班で設定した出発予定時刻を目指し、荷物のパッキングをしていく。ザックを背負う時、ダニ除けのブルーシートをしまう時、声を掛け合いながら活動している。

パッキングのできた班からいざ出発！方丈原を通り、十種ヶ峰の肩と呼ばれる中腹まで行き、今日のゴール地点である神角地区の神社を目指す。

初めて長い距離を歩く。昨日のテント場までの移動でさえ、音を上げていた子どももいた。今日からは、それとは比べものにならないほどの距離と傾斜が待ち構えている。まさに自然へのチャレンジ。日常生活ではまず体験できない。しかも、同じ班の仲



間も知り合ったばかり。この非日常の経験がチャレンジプログラムならではの。こういう状況でこそ、自分への挑戦ができる。スタッフの一人として、子どもたちの挑戦を全力で支えたいと心を新たにした。

実際に山歩きをする中で、水分の摂り方、ゴープ（行動食）の食べ方、休憩の取り方、コンパスの使い方、地図の読み方など、インストラクターから教わりながら自分たちでもやってみる。「あっ地図と同じように

道があった。」その声が頼もしい。

途中、十種ヶ峰の肩よりピークを眺めた。ファイナルツアーでは、十種ヶ峰のピークアタックに挑戦する。遥か彼方の頂上を見上げて、子どもたちは何を思っただろうか。「よしっ！」とやる気スイッチを入れた子ども。「え…？あんな遠いところまで？」と不安になった子どももいたことだろう。ファイナルツアーで十種ヶ峰の山頂に登った時、子どもたちがどんな表情をしているか、今から楽しみである。



3日目バックパッキング

期 日：平成28年7月24日（日）

場 所：神角神社～クォーツバレー 泊

テーマ：発見の日（探求の意欲）

【活動の様子】

今日も快晴。蝉の声が朝からにぎやかだ。今日は、神角神社からクォーツバレーを目指す。

昨日までの山歩きとは打って変わって、ひたすらロード（アスファルト舗装された道路を歩く）の一日。ぎらぎらとした日差しと、地面からのじりじりとした照り返しに耐えながら一步一步進んでいく。暑さとの闘いである。途中、水を被ったり、水分や塩分を補給したりしながら、熱中症に気を付けながら進む。



分かり易い道ではあるが、昨日、インストラクターから教わったことを思い出しながら、地図やコンパスを使って道を確認めながら進んでいく。

クォーツバレーに着くと、川でお待ちかねのディップ（水浴び）！子どもたちは大喜び！！暑さでほてった体に、川の水の冷たさが心地よい。風呂に入らない環境の中で、自然の水の恵みに心から感謝していることだろう。

3日目になると、チームワークが少しずつ芽生えてくる。例えば、荷物の分配。共同装備を誰が持つのか決める時に、「私が持つよ」という声が聞こえるようになってきた。初めて出会うメンバーの中で積極的に動くことは、子どもたちにとっては大きな挑戦だと思う。家庭や学校の中で、積極的な子どもたちばかりではないだろう。「誰かにお願いされたらやるけど、自分からは…」そんな子どもも参加しているかもしれない。グループの中で積極的に動ける自分という、新たな一面を発見するきっかけにしてくれたらと願う。



発見と言えば、神角の神社を出発した班から「マムシがいた！」との連絡が入った。子どもたちにとっては初マムシだったのでは？

4日目バックパッキング「高岳ピークアタック（登山）」

期 日：平成28年7月25日（月）

場 所：クォーツバレー～高岳～クォーツバレー 泊

テーマ：思索の日（克己と反省）

【活動の様子】

早朝4時半に小雨が降る。今日の活動は高岳へのピークアタック。高岳登山に向けて、天気が少し心配になる。各班インストラクターに天気の情報を提供する。

天候は崩れず、予定通り高岳頂上を目指す。高岳登山のねらいは、子どもたちの力だけで山を登り切る事。そのため、インストラクターは後方支援に回る。

ファイナルツアーでは十種ヶ峰へのピークアタックを予定している。今日は、その予行練習にもなる。今日、無事に高岳登山を成功させることで、自信をつけて最終日の十種ヶ峰ピークアタックにつなげてほしい。



今日は、必要な荷物だけをザックに入れて出発した。軽装ながら、これまでの疲れもあって体は重い。登山道の途中には岩場もある。子どもたちにとっては決して楽な登山ではない。

もう少しで山頂というところからしばらく斜度のきつい上り坂が続く。子どもたちは汗を流し、疲労もピークのようなのである。しかし、お互いに励まし合いながら全員無事に山頂を踏むことができた。あい

にく雲が多い天気で、いつもは正面遠くに見えるはずの十種ヶ峰が見えなかったが、それでも子どもたちは登り切った達成感に浸っていた。

下山後はお楽しみのディップ。このディップの時の子どもたちの様子も、日を追うごとに変わってきている。みんなが初めから、バッチャーーン！！と勢いよく水に入っているわけではない。恥ずかしかったり、自然の水に浸かることが怖かったり…。今日は、昨日より積極的な子どもが増えていた。様々な苦難を共にしたことで、グループの仲が深まり、子どもたちの心が解放されてきたことがディップの様子からもうかがえた。

ディップ後の夕食の準備では、一人ひとりが自分のできることを探し、声をかけ合っている。ある班は、マカロニシチューを準備していた。人参や芋を切り、鍋の中に入れて煮込んでいく。疲れた体にシチューが染み渡っていったようだ。「美味しい」「お代わり」との声が響き渡る。しっかり食べて、しっかり寝て、明日の活動に備えて欲しいと思う。



5日目 ロッククライミング・バックパッキング

期 日：平成28年7月26日（火）

場 所：クォーツバレー～船方農場 泊

テーマ：挑戦の日（困難の克服）

【活動の様子】

後半戦のスタートは、バックパッキングから始まった。テントの撤収などを手際よく行い、船方農場へ向け出発した。

今日と明日、2グループずつロッククライミングを行う。この活動は、まさに自分・仲間・自然へのチャレンジを体感できるものとなった。ロッククライミングと聞けば、人工の壁を登るボルダリングをイメージするかもしれないが、ここでの活動は人工の壁を登るものではない。自然の岩を登るのだ。真夏の日差しを浴びた岩はじんわり熱い。



チャレンジする子どもは命綱をつけて恐怖心や疲れと戦いながら、懸命に登っていく。自分への挑戦だ。そのチャレンジャーを心身ともに支えているのがビレイヤー（命綱を持つ人）及びセカンドビレイヤーである。他のメンバーもアドバイスや励ましをくれる。「右の岩に手をかけて」「足をもう一歩左上に伸ばして」と道を示してもらえることで、チャレンジャーは進むべき道を見つけることができる。

グループの仲間がいるから、チャレンジャーは安心して自然に挑むことができる。この活動は、個人の挑戦であると同時に仲間との挑戦なのだ。

実際、前日の高岳登山の際にけがをしまいロッククライミングに参加できない子どもがいたが、彼も仲間に声を掛け続けていた。自分にできる役割に最大限のチャレンジを行う。気持ちのたくましさを感じる場面だった。

もう一つ、子どもの成長を感じられたエピソードがあった。船方牧場へ向かう途中で、女子班の1人が地図を落としてしまったことに気づいた。彼女はこれまで、周囲への配慮よりも自分の気持ちを優先した言動をしてしまうことが多かった。そんな彼女が「落とした地図を一人で探しに戻るのは無理。だから、みんな付いてきてほしい」と仲間に頼んでいた。仲間に助けを求めることができることは、仲間を信頼していること、素直に自分の心を開こうとしている気持ちの表れである。彼女の成長をインストラクターと共に喜ばしく思った。

6日目 ロッククライミング・バックパッキング

期 日：平成28年7月27（水）

場 所：船方農場～神角神社・鍛冶ヶ原 泊

テーマ：冒険の日（責任と信頼）

【活動の様子】

昨日とは別の2グループが、ロッククライミングに挑戦した。今日は早朝に行くので、岩が熱くない分、少しは登りやすいかもしれないが、昨日同様、自分・仲間・自然への挑戦である。

ロッククライミングを既に済ませた2グループは、ソロの活動をした（本日、ロッククライミングを行う2グループは、昨日のうちにソロの活動を済ませている）。ソロでは、親からもらった大事な手紙に返事を書く活動を行った。



船方牧場の大草原の中で、みんなから離れて一人で親からの手紙を読むと、多くの子どもが涙を流していた。人目が無いことで素直になれるというのもあるだろうが、これまでの疲れも重なり、胸にこみ上げるものがあつたに違いない。親と離れてみることで自分に向けられている深い愛情や親の有り難さを再確認し、親の気持ちに触れることで、プログラムにおける自分の頑張りを振り返り、明日からのファイナルツアーへの

決意を新たにできたことであろう。

今日のテン場は、神角神社と鍛冶ヶ原の2か所である。それぞれの班で、明日からのファイナルツアーに向けてのミーティングが行われた。どんなルートを進むのか、何のために十種ヶ峰ピークアタックに挑戦するのか。山の歩き方はもちろん、グループのチームワークや個人の成長など、これまでの5日間のプログラムの中で身に付けたものの集大成としての登頂成功を願っている。



7日目バックパッキング「ファイナルツアー」

期 日：平成28年7月28日（木）

場 所：神角神社・鍛冶ヶ原～十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場 泊

テーマ：覚醒の日（実行力と協調性）

【活動の様子】

ついにファイナルツアーの日を迎えた。標高989mの十種ヶ峰山頂を目指す。

2日目に十種ヶ峰の肩から山頂を見上げた時と今朝を比べ、子どもたちの気持ちはどう変化しているだろうか。当初、不安に思っていた子どもが「きっと頑張れる！」と自信をもつことができた一方で、「できると思っていたけど、やっぱり無理かもしれない…」とやる気がしぼんでしまった子どももいることだろう。

しかし、ファイナルツアーは子どもたちの力だけで成し遂げることを目標としている。インストラクターは班の後方から付いていくだけで、必要時以外、声をかけることはしない。地図やコンパスの使い方、休憩の取り方、荷物の分け方など、すべて子どもたちが決めていく。これまでのプログラムを通して培った山歩きの技能とチームワークが試される、まさに集大成の1日なのである。



いよいよ登山がスタートした。山頂までの途中、ポイントとなる地点ごとに、目標時刻を設定していた。ある班は最初のポイントでは間に合わなかったものの、次のポイントを無事クリアし、その次もクリア…と盛り返してきた。一度、目標時刻をクリアできたことが自信となり、グループの気持ちは高まったのだろう。歩き始めて7時間かけて見事に山頂に辿り着いた。

様々なドラマを各班が味わい、全ての班がピークアタックを成功させることができた。

グループが成熟してきていることが見て取れる場面があった。ある班では、当初、互いの思いをうまく伝え合えていなかった。そんな班の雰囲気は少しずつ変わってきた。印象的だったのが「アルプス一万尺」だ。全員が同じことをして同じように笑っている。元々見ず知らずだったメンバーが、同じことを同じように面白いと思えている。このファイナルツアーを全員でどのように成し遂げたか、今日のミーティングで思いをしっかりと共有してほしい。



8日目 クリーンナップ・入浴・ラストナイトミーティング

期 日：平成28年7月29日（金）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場 泊

テーマ：決意の日（達成感と自信）

【活動の様子】

昨日のファイナルツアーを終えて、子どもたちの疲れもピークに達している。残り2日間、無事に活動を終わられるために再度気持ちを引き締めなければならないと感じた。



今日の午前中は、クリーンナップをする。テントやザックといった物品を隅々まできれいにする、なかなか骨の折れる活動である。7日間の泥汚れを濡れ雑巾で拭き取り、その後、乾いた雑巾で水気を拭き取る。次回、この物品を使う人たちが気持ちよく使えるように、子どもたち

はあらゆる物を心を込めて丁寧に拭き上げていた。拭き上げた後、本部スタッフ、自然の家の職員さんにチェックをしてもらおう子どもたちの表情が凛々しい。「よろしくお願いします」の声が響き渡る。



クリーンナップが終わった班から、1週間ぶりの風呂タイム。途中、川で水浴びをしたとは言え、石けんを使って体を洗うのは久しぶりである。当然、泡立たない。2回目、まだ泡立たない！3回目ようやく泡立つ。日頃の風呂の気持ち良さ、ありがたさを実感したことだろう。子どもたちの体から石けんの良い香りがする。自然の中でゆったりとした時間が過ぎる。



このメンバーで過ごす最後の夜。夕食は少し豪華に鶏の照り焼き丼。食事が済んだら、ラストナイトミーティング。プログラムを振り返り、一人ずつ感想を述べていく。きつかった思い出、助けてくれた仲間への感謝。子どもたちから実感に溢れた言葉が出てくる。

子どもたちはどんな思いで眠りについたらだろうか。山の生活も明日で終わり。名残惜しいような、ほっとするような…。「正直こんなにきついと思わなかった」「仲間ときつさを乗り越えて新しい自分に出会えた」等。毎年、感じることだが、どんなきっかけで参加したにせよ、子どもたちのチャレンジにいつも感動する。様々な課題を乗り越えて、子どもたちは間違いなく始めよりずっと逞しくなった。明日の個人ランでは、子どもたち一人ひとりのチャレンジが待っている。どんな姿を見せてくれるか楽しみである。

9日目 クリーンアップ・個人ラン・懇談会・閉会式

期 日：平成28年7月30日（土）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場

テーマ：新たなる旅立ちの日（自立と奉仕）

【活動の様子】

ついに迎えたプログラム最終日。

10時半から個人ランが始まる。1km、1.5km、2kmの中から自分で走る距離を決める。これまでのプログラムでは、仲間と共に励まし合いながら活動してきた。重い荷物を誰かが持ってくれたり、「きつい、つらい」といった本音も誰かが聞いてくれたりした。しかし、今日の個人ランは自分一人の力で走り切らなければならない。



ここで出会った仲間との生活も今日で終わる。明日からは、いつもの家庭、学校、友だちとの生活が待っている。8日間のプログラムで成長した自分は、これからどんな自分になっていきたいのか。個人ランのゴールの先に、これからの自分像を思い描きながら走っていく。

アップダウンのある道を懸命に走った。特に最後のアスファルト坂の斜度は酷なほどに厳しい。それでもゴールをめざして進み続ける子どもたち。全員、走り切ることができた。



ゴール直後の子どもたちの顔が誇らしく感じられた。

すべての活動が終わって閉会式を行った。子どもたちとインストラクターで一つの円になり、その周りに保護者が円を作り見守る。一人一言ずつ、自分のチャレンジについて話した。一人ひとりの話が終わると全員で拍手。大きな仕事をした後の自信に満ち溢れた表情を子どもたちはしていた。

9日間のプログラムは今日、この瞬間に終わる。しかし、これはゴールではない。新しい自分としての生活の始まりである。子どもたちは、これから先、何度もつらいこと、苦しいことにぶつかるだろう。そんな時は、このプログラムで頑張った自分を思い出してほしい。そして、頑張りを認め合った仲間がいることを思い出してほしい。これからも互いの頑張りを応援し合える仲間がこの世界に存在することを忘れないでほしい。

